2005.10.12

毎日新聞　（第3種郵便物認可）

難病の子ども支える院内ボランティア

生きる　小児がん征圧キャンペーン

国立国際医療センター

骨髄移植の佳奈乃ちゃん

「遊び」で闘病生活に耐え

国立国際医療センター（新宿区）の小児病棟に、小児がんと闘い続ける少女がいる。先月、父親（41）から骨髄移植を受けた練馬区の小学3年生、水嶋佳奈乃ちゃん（8）。免疫力低下による感染症を防ぐため、無菌室内で過ごし1カ月。両親とともに、院内のボランティア団体「遊びのボランティア　ガラガラドン」の保育士や学生が、病室の佳奈乃ちゃんを支えている。

ある日の午後、グループの遊野真智子さん(22)＝日本女子大4年＝が病室を訪れた。手指を消毒してマスクや帽子、白衣を身につけ、無菌室内に入る。「今日も来たよ。何して遊ぼうか?」。手を握って話しかけると、ベッドに横になった佳奈乃ちゃんの表情がなごんだ。目が不自由な佳奈乃ちゃんは耳や指先の感覚が鋭く、キーボードの演奏や編み物が得意だ。

「帰らないで、ずっといて」。涙声でせがまれることも。遊野さんは「表情がだんだん豊かになっている。私自身、彼女からたくさんのことを教わった」と語る。

佳奈乃ちゃんは4年前に悪性リンパ腫を発病。脳やせき髄に腫瘍が及び、視力も急速に低下した。病院外の人と話す機会は、週1回の盲学校教諭の訪問とピアノ教師の来訪だけ。長期入院による影響を案じた主治医が、院内で91年から「ガラガラドン」を組織する保育士の坂上和子さん(51)に相談。6月からメンバー17人が交代で週3回の訪問を始めた。

感染症の懸念や管理の難しさから、外部との接触を許可する病院は珍しい。母親(38)は「外に目が向き、治療の苦しみがまぎれました」と効果を話す。

移植後は拒絶反応による高熱が続き、皮膚やのどの粘膜が荒れるなど厳しい状況が続いており、グループは訪問回数を倍増させた。坂上さんは「ボランティアが運ぶ『遊び』は、生きる意欲につながります」と話している。【井上卓弥】

今年8月、骨髄移植を控えて戻った自宅で、ボランティアの坂上さん（左）と遊ぶ佳奈乃ちゃん